



Title	芥川龍之介「戦遮と仏陀」考：その材源問題、及び「奉教人の死」との関連を中心に
Author(s)	高, 子瑜
Citation	日本語・日本文化研究. 2021, 31, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85226
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

芥川龍之介「戦遮と仏陀」考

——その材源問題、及び「奉教人の死」との関連を中心に——

— 高 子 瑜 —

一、はじめに

芥川龍之介には一般に知られる百四十余編の小説の他に、歴大な量に及ぶ未定稿作品も残っている。これら未定稿作品に関しては、現在まで種々の文献資料で公開・紹介されてきた（注1）。例えば、「老狂人」、「暁」などキリスト教関連の作品、或いは「全印度が……」など「羅生門」と関わりのある作品、又は「弘法大師御利生記」、「尼と地蔵」など、未定稿であつても、それ自体がほぼ完成された作品等がある程度注目されてきた（注2）。だが、全体的に言えば、光が当てられていない作品がまだ多くある。このような未定稿作品に「完成されたもの」にない心の底の動きや、ナマなるが故の素顔がここに

感知されないでもない（注3）。また、当時の芥川の読書遍歴や文学的関心の一端を窺うに役に立つと思われる。本稿はその中の一編である未定稿戯曲「戦遮と仏陀」^{サレンヤ}（注4）を取り上げて、その材源問題、及び「奉教人の死」との関連を中心として考察を行う。

先行研究を見ると、「戦遮と仏陀」が『新思潮』時代の芥川の戯曲創作への熱意、及び芥川の唯一の発表された戯曲作品「青年と死」（『新思潮』、大三・九）の材源問題などを論じる際に言及されている（注5）。「戦遮と仏陀」を真正面から考察する論考は見出せない。本稿では、先行研究に指摘されている材源の堀謙徳著『解説西域記』（前川文栄閣、大元・一一）を検討したうえで、芥川の実際用いた材源が同氏著『美術上の釈迦』（博文館、明四十三・九）であることを

検証する。また、『美術上の釈迦』の戦遮記述から仏典上でのチンチャ（戦遮）説話、さらに、一連の類話にまで視野を広げると、意外にも「戦遮と仏陀」と芥川の切支丹物の代表作である「奉教人の死」と材源や構成上で繋がりが浮かび上がってくるので、そのようなまだ注目されていなかった繋がりを指摘する。

芥川の初期未定稿作品に「老狂人」、「暁」などキリスト教関連の作品が見えるほかに、宗教的なものとして、「戦遮と仏陀」「弘法大師御利生記」「天竺の波羅門」など仏教関連の作品も目立っている。その中のキリスト教関連の作品については、芥川の後年のイエスへの関心などをめぐって論じられてきたが（注6）、仏教関連の作品に対する注目はまだ物足りないと言わざるを得ない。「戦遮と仏陀」は釈迦（仏陀）の説話を描く作品として、後年の童話文学「蜘蛛の糸」、及び歴史小説「尼提」（『文藝春秋』、大14・9）に一脈通ずるものがあると言えよう。本稿では、「戦遮と仏陀」の材源問題などを考察することで芥川と釈迦（仏陀）説話との関連についても考える。

二、「戦遮と仏陀」と『解説西域記』

材源問題の検討を始める前に、まず「戦遮と仏陀」について紹介してゆく。この作品が初めて活字化されたのは、『芥川龍之介未定稿集』である。編集者は芥川の死後に彼の遺品や遺稿の保管・整理に携わった甥の葛巻義敏氏である。岩波版全集（全二十四巻）の第二十二巻（「未定稿」、平九・一〇）にはこの作品が再録されている（後述す

るように本文上では少し増補がある）。その原稿は十ノ廿松屋製原稿用紙十一枚という形で山梨県立文学館に所蔵されており、同館編『芥川龍之介資料集 図版2』（平五・一一）に「155〈戦遮と仏陀〉草稿」という表題を以て写真版で公開されている。

『芥川龍之介未定稿集』では「戦遮と仏陀」が「金瓶梅」「弘法大師御利生記」「SPHINX(a farce)」など七点の作品と共に、「未定稿戯曲断片」という総題の下に収められている（注7）。葛巻氏の編者注では、「その内、「弘法大師御利生記」と「SPHINX」には、明らかに「柳川隆之介」の署名があり、（中略）、その他、「SPHINX」、「戦遮」と、この「金瓶梅」等も、それらと余り時間的に距離ある作品と思わない」とある。つまり、「戦遮と仏陀」草稿には時期を示せる署名が見えないが、その執筆時期は「柳川隆之介」時代前後だと推測されている。言うまでもなく、「柳川隆之介」は大学時代に『新思潮』同人の頃、芥川が用いていたペンネームである。

「戦遮と仏陀」の分量は、四〇〇字詰め原稿用紙に換算すれば一六枚半である（注8）。「戦遮と仏陀」は室内と室外という二つの場面から構成されている。登場人物は四人の女と戦遮、波羅門達と喬多摩（釈迦）等である。第一の場面である、室内での四人の女と戦遮の会話は現存テキストの内容のほぼ全体を占めている。第二の場面である、室外での戦遮と喬多摩の間で起こるであろう出来事は、僅かに書き出しの一文で中断している。作品の梗概は次のようである。

室内では四人の女（名前は設定されておらず「女の一」などとなつ

ている)が、「女の三」が慕う男がいるかどうかをめぐって騒いでいる。この時、町を歩く波羅門達の叫び声が窓の外から聞こえてくる。人々の供養が喬多摩に傾けられていることを不満に思って、自分たちにも供養せよと訴えている。女達が波羅門達の狂気の沙汰を議論している時に、戦遮が給仕に呼ばれて波羅門達が待っているお寺へ行く。窓の外では喬多摩が現れて大勢の人の声が響く。室外では、戸口から出る戦遮は歩いてくる喬多摩を見ると少しためらったあげく、首環の紅玉をはずす。何か起こりそうなところで、戯曲が途切れてしまっている。

『芥川龍之介資料集 図版2』で原稿を見ると、第二の場面、室外での出来事はただ最後の半ピラ分を占めている。そのためであるか、葛巻氏は『芥川龍之介未定稿集』でこの部分をカットしている。岩波版全集の第二十二巻に再録された時に復元されている(以下、岩波版全集のテキストを用いる)。「戦遮と仏陀」では話の全貌がまだ見えないが、安田保雄氏は「青年と死と」の材源とみなされる『仏教各宗高僧実伝』を扱う際に、注で「戦遮と仏陀」の材源について次のような発言をしている(注9)。

「弘法大師御利生記」と同じく『芥川龍之介未定稿集』に収められている戯曲「戦遮」(断片)の中に出てくる、仏のために懷妊させられたとしてこれを誹謗したという、外道の女戦遮についての説話は、『今昔物語』にも、『各宗高僧実伝』にも見えず、芥

川は何か他の仏教説話集を見ていたのではないかとも考えられる。

以上の発言では「戦遮と仏陀」の材源が提示されていないが、妊娠姿を装って仏を誹謗するという戦遮説話が持ち出されている。そして、久保忠夫氏はこの発言を受け止め、「戦遮と仏陀」の典拠を仏典の『大唐西域記』と指摘しながら、芥川の用いたテキストは堀謙徳著『解説西域記』だと主張している(注10)。『大唐西域記』(全二二巻)は唐の高僧玄奘が六二九年から六四五年までインド・西域の諸国を遊歴した旅行見聞録である。その巻第六の第一節「室羅伐悉底国」に(九)「戦遮の中傷」という説話が記されている。『解説西域記』は『大唐西域記』の解釈・考証書であり、該当説話の箇所では、『大唐西域記』の原文に続いて、堀謙徳の手による考証も記されている。芥川の用いたテキストを『解説西域記』としている理由については、久保氏は芥川全集に翻刻された「手帳」における次のようなメモを引用している。

○堀謙徳、西域記

○貧民通俗小説をよむ。伯爵大学生など出てくると喜び貧民出てくると悲観す。(美しき村)

やや長くなるが、氏の説明も以下のように引用する(改行はそのま

ま)。

「美しい村」という未定稿があつて、全集に収められている。「美しき村」と「美しい村」とが同一のものであるとして、「美しい村」からこの手帳のつかわれた年代を割り出し、それによつて『堀謙徳、西域記』を読んだ時期を特定しようところみたが、それは成功しなかった。

いま一つ、「今昔物語に就いて」(昭2・4)に「耳は高く」以下の言葉は同じ語を載せた「大唐西域記」や「法苑珠林」には発見出来ない。(この話は誰でも知つてゐる通り、釈迦仏の生まれない過去世の話、—Jataka 中の話である。)—というのにも出た。ここにある「大唐西域記」はやはり、堀謙徳の『解説西域記』を意味するものと思われる。「美しい村」「戦遮」「今昔物語に就いて」は、時期は特定出来ないが、そう時をへだてずに書かれたものと推定される。そして、それは、当て推量の域を出ないが、大正十代後半以後に属するであろう。

芥川の手帳に「堀謙徳、西域記」というメモが見えるので、芥川が実際、『解説西域記』にふれた可能性は高いと考えられる。それによつて久保氏は『解説西域記』を「戦遮と仏陀」の直接的な材源としている。また、右の引用文で述べられている「美しい村」、及び「今昔物語に就いて」における「大唐西域記」云々の記述との関連を以て、

氏はこの三者の執筆時期は間近であり、大正十代後半以後だろうと推論している。この執筆時期についての推論は葛巻氏の推測(「柳川隆之介」時代前後)と相違がある。

久保氏の推論を読んで二つの疑問がある。まず、「今昔物語に就いて」における「大唐西域記」云々の記述については、これは恐らく『解説西域記』と無関係だろうと思われる。芥川が「耳は高く」以下の言葉は」という一段を書く時に依拠したのは、『攷証今昔物語集 天竺・震旦部』(富山房、大正二・六)だと既に研究者らによつて指摘されたからである(注11)。芥川が文章に挙げている『大唐西域記』と『法苑珠林』はその書物に参考文献として記されている。

また、「美しき村」というメモについては、「美しき村」と「美しい村」が同一のものとすれば、岩波版全集の第二十二巻を確かめると、「美しい村」という未定稿が見られる。「後記」によれば、「美しい村」草稿の文末では、「(未完)」「(大正十四年頃)」とある。

また、「手帳」を調べてみると、上記の二つのメモの前後でも、「美しい村」を構想していたと思われるメモも多く見受けられる。未定稿「美しい村」は一章だけで中断しているが、芥川の現実世界への関心が現れる作としてよく取り上げられ、その内容は千葉県北部に位置する現在の印旛郡八街町に当たる八街に発生した社会的事件の影を落としている。芥川の年譜では、大正十三年の見出しに「四月、千葉県八街に小作人の紛擾史実地調査のため赴く」とある(菊地弘等編『芥川龍之介事典』増訂版、明治書院、平一三・七)。

以上のことを合わせて考えると、「美しい村」は大正十三、四年頃に構想されていた作と言つてよからう。手帳では「堀謙徳、西域記」というメモは「美しい村」創作のメモ群に挟まれているので、芥川が『解説西域記』にふれた時もこの時期、或いは以降であつた可能性が高いであろう。したがって、芥川が『解説西域記』に基づいて「戦遮と仏陀」を書いたとすれば、その執筆時期も大正十三、四年頃、或いは以降であつた可能性が高いということになるであろう。

三、『美術上の釈迦』における「妖女の謀計」

未定稿「戦遮と仏陀」は早々と中絶してしまつてゐるが、作中に仏陀である喬多摩と外道の女の戦遮の名が明記されている。加えて、仏陀と波羅門達との供養をめぐる紛争など戦遮説話の筋書も描かれてゐるので、芥川は戦遮説話を収載している仏典か何らかの仏教文学に取材したに違いない。手帳のメモから見れば、芥川が『解説西域記』に接した可能性が高いと言えるため、久保氏の主張には一理あると認めよう。ただし、氏の指摘を踏まえて調査したところ、芥川の用いた材源は『解説西域記』ではなく、『美術上の釈迦』だと結論を修正すべきである。この節では以上の主張を中心に検証してゆく。

『解説西域記』にある「戦遮の中傷」の考証部の文末には、「〔参照『美術上の釈迦』一九八頁〕」という注記が付されている。これをヒントとして探ると、同じ堀謙徳の著書である『美術上の釈迦』の第一章の第一二節（総第六十四節）「妖女の謀計」（本文表題が「四

妖女の謀計」と誤植）に、『解説西域記』より一層詳しく戦遮説話が紹介されている。『美術上の釈迦』は釈迦の伝記伝説を紹介しながら、その対応箇所でインド仏教上の彫刻図が挿入されている。「妖女の謀計」にはあいにく彫刻図が付いていないが、詳しい叙述により戦遮説話の全貌が見える。その粗筋は以下のようにまとめられる。

仏の威光と人望が高まる中、見劣つた諸外道は街路に立つて、仏と同等の供養を求めて呼ばれるが甲斐がない。そのため、集まつて人前で仏を辱める策を密議する。時に舍衛城に戦遮という外道の教を信じる美少女がおり、諸外道に煽動されて仏の徳を傷つける謀計をめぐらす。舍衛城の城民が祇園から帰る時に、戦遮は美衣を着て祇園に向かい、その近くの寺院に一晚泊まる。翌朝、城民が祇園に来る時に出て舍衛城に帰る。宿泊先を問う人に仏と共に祇園の香殿で眠つたと答える。未信者がこれを聞いて大いに驚き、仏徳を疑う。

八、九ヶ月の後、戦遮は木盆を腹部に繋げて臨月の妊婦姿を装う。ある夜、戦遮は祇園にやつてきて、時を見て立ち上がつて、仏の子を孕んでいると仏を難詰する。この時に、天帝釈（仏教の守護神）が一小鼠の形に化現し木盆を繋ぐ糸を噛み、戦遮の偽りの妊婦姿が直ちにばれてしまう。大衆がこれを見て戦遮の謀計を知り、彼女を捕まえて祇園の境外に追い出す。戦遮は祇園を出ると大地が裂けて直ぐに阿鼻地獄に落ちる。諸外道の謀りが破れて仏の徳が益々高くなる。

芥川の「戦遮と仏陀」をこの「妖女の謀計」（以下、テキストの引用にあたっては、適宜漢字や仮名を現行のものに改める）と対照する

と、その影響関係が明らかである。例えば、戦遮と諸外道（波羅門達）の関係については、「戦遮と仏陀」と「妖女の謀計」はその設定が同じである。「妖女の謀計」に（以下、傍線は全て引用者による）、「其名を戦遮（Cīcā Mānavikā）といい、外道の教を信じ」とあるのに対して、「戦遮と仏陀」では「戦遮さん 今 みんな 外を通つてよあなたの信心してゐる波羅門の人たちが」と、同じ関係が提示されている。また、「妖女の謀計」の「戦遮一日外道寺院に詣で外道を礼敬して座せり。」という筋書きが、「戦遮と仏陀」の末尾の「戦遮さんに あの波羅門の人々が お寺で待つてゐますから 来て下さいつて」という、戦遮が給仕に呼ばれて波羅門達の寺院に行くという箇所と照応できよう。

そして、最も明らかなのは次のような箇所である。「妖女の謀計」では、諸外道（波羅門達）が仏陀への崇敬の高騰を嫉妬したことについて、次のような表現が文中に記されている。

皆な佛を供養しければ、恰も日出で螢火暗きが如く諸外道屏息し、人之を供養せざるに至れり。諸外道即ち街路に立ち呼んで言わく「喬答摩は佛陀なりや、我等も亦た佛陀なり。喬答摩を供養して福利あれば、我等を供養するも亦大功徳あるべし、願はくは我等を供養せよ」

「戦遮と仏陀」では、次のようになっている。

女の三 波羅門の人たちが 自分たちも仏陀だつて 市を歩いてゐるよ みんな 市の人がみんな 喬多摩にばかり供養をして あの人たちにしないから 怒つてゐるんですつて

波羅門の声 喬多摩が仏陀なら わしたちも仏陀ぢや
他の波羅門の声 さうぢや さうぢや 喬多摩を供養して
功徳があるなら わしたちを供養しても 功徳がなうてはならぬ

芥川は「戦遮と仏陀」で「妖女の謀計」の記述をほぼそのまま借用している。この記述は『解説西域記』（『大唐西域記』）には見えないので、芥川が『美術上の釈迦』のほうを参考して書いた可能性が高いであろう。ただし、「妖女の謀計」の冒頭では、堀謙徳氏が戦遮説話の典拠を断っている。それは仏の前世を語るインドの説話集『ジャータカ』所収の総第472話「マハーパドゥマ前生物語」という仏教説話である。実際に『ジャータカ全集』（全二〇巻、中村元監修・補註、春秋社、昭五十七・六・平三・一一）第六卷（松田慎也・岡田行弘・岡田真美子訳、平元・一一）を確かめたところ、「マハーパドゥマ前生物語」にその記述と類似する語句も見られる。そのため、芥川が借用しているその記述は堀氏独自の表現ではないことがわかる。

しかし、芥川の用いた材源は『美術上の釈迦』であることは依然として主張できる。なぜかという、芥川が『美術上の釈迦』にふれた

跡が確実に残されているからである。芥川がもう一つの未定稿作品「全印度が……」を書く際に、一高時代に用いていたとされるノート「貝多羅葉1」(全集未収録、初出『芥川龍之介資料集 図版2』)に、次のような一段のメモを書き留めている(注12)。

佛 吠舎離城に入るのは 佛鉢の水を街路に散ぜしむ 惡鬼
佛徳を恐れて退散し 満城の病者 悉癒へたり (「貝多羅葉1」
3、翻刻は引用者による)

『美術上の釈迦』の総第五十六節「吠舎離城の遊化」の中に、次のようなほぼ一致している記述が見られる。

佛進んで吠舎離城に入り、仏鉢の水を街路に散ぜしむ。惡鬼仏徳を恐れて退散し、満城の病者皆な全く癒へ、

また、ノートでは、隣の頁である「貝多羅葉1・2」に「釈迦が悪象を伏す」という一段のメモが記されている。紙幅が限られているため詳しくは別稿に譲らざるを得ないが、これも明らかに『美術上の釈迦』の総第七十六節「提婆の分立」に拠るものと断定できる。さらに、以上の二段のメモの周りに、『美術上の釈迦』の内容から記し残したメモ、例えば、「尼蓮禪河」、「瞿曇」という固有地名、人名に関連するメモなどが多く見当たる。これらのことから、芥川が『美

術上の釈迦』に触れたことはほぼ確実と言えよう。

以上の『解説西域記』(『大唐西域記』)には見えない表現、及び芥川のノート「貝多羅葉1」に記されているメモ群を根拠として、「戦遮と仏陀」の材源は『解説西域記』ではなく、『美術上の釈迦』だと結論づけたい。また、前述したように、「貝多羅葉1」の使用時期が一高時代とされるので、「戦遮と仏陀」の執筆時期については、やはり、編集者の葛巻氏の推測(「柳川隆之介」時代前後)のほうがより事実に近いと考えられよう。

次に「戦遮と仏陀」を「妖女の謀計」と対照することで、芥川の独自性を考えてみよう。「戦遮と仏陀」の独創性として、まず指摘できるのは、仏教文学にある古めかしい説話に目を留め、その説話を生かして近代文芸形式の戯曲に仕立てようとしたという試みである。言うまでもなく、この戯曲未定稿「戦遮と仏陀」と対照的に、龍樹菩薩の俗伝に取材して綴られて、仏教説話の要素が入っている戯曲作品「青年と死」とはこのような試みが完成したものだと思う。

内容の面では、「戦遮と仏陀」の独創性といえば、例えば、四人の女が登場して男の噂をめぐって騒いでいる場面が「妖女の謀計」には見つからない。このような複数の人の会話による幕開きはかなり戯曲的なアレンジだと思われる。ちなみに、「青年と死と」においても、大勢の女達が青年の来るのを待つて騒いでいる場面が創出されている。「戦遮と仏陀」と「青年と死と」は材源上の類縁性(同じ仏教説話に取材)が見られる他に、戯曲の場面造形にも近似している側面が

見られる。推測の域を出ないが、両者は恐らく時期的にかなり近く構想されていただろう。

ただし、完成している戯曲「青年と死」と異なり、「戦遮と仏陀」は未定稿のまま終わってしまった。『戦遮と仏陀』において、これからの場面でいかなる展開が広がっていくかは知ることができない。戦遮と波羅門達の関係が文中に提示されているので、「妖女の謀計」の筋書きに従って推測すれば、これから波羅門達は戦遮を煽動して仏陀の徳を傷つけるという謀計に漕ぎ出すことが想像される。しかし、芥川が具体的にいかに「妖女の謀計」に基づいてその謀計を展開していくかは、現存のテキストから推測するすべが全くない。

現存のテキストから見られるのは、四人の女達の男の噂をめぐる会話が主要内容を占めていることである。これからの主人公であるはずの戦遮はただ脇から女達の会話に相槌を打っただけである。つまり、戦遮は現存のテキストでは存在感がまだ薄い。ただし、「妖女の謀計」では、戦遮が素直に波羅門達に従って喬多摩の徳を傷つける謀計に乗り出すことになっており、喬多摩との間で情感上での葛藤が見えない。「戦遮と仏陀」においては、例えば、「女の二」が「(「女の三」は、引用者注)あの方(喬多摩、同)が好きなんですって」と戦遮に話しかけるのに対して、戦遮が「まあ、さう」という曖昧な答えをすることから、戦遮と仏陀の間で何らかの複雑な絡みがある展開が予定されていたことが読み取れよう。芥川が「戦遮と仏陀」で喬多摩との間で戦遮に如何なる関係を持たせるか、また、戦遮が信仰す

る波羅門達と喬多摩との紛争の中で、戯曲の次の場面で戦遮にどのような役を演じさせるかは、彼らしい展開が期待されるところであるが、戯曲が中絶してしまっているのが残念でならない。

また、最後の中絶した場面を「妖女の謀計」中の展開と対照すると、当てはまる箇所が見つからない。現存のテキスト全体を見れば、その内容はまだ「妖女の謀計」における最初の諸外道(波羅門達)が不平を鳴らすことに留まっているようである。その上、戦遮説話のクライマックスと言える戦遮の謀計が露見する場面はまだ遠々しいので、未定稿「戦遮と仏陀」のこれからの発展には期待できるところが多いだろう。『芥川龍之介資料集解説』では、海老井氏が「戦遮と仏陀」草稿について以下のような解説を書いている(注13)。「これ(「戦遮と仏陀」、引用者注)は初期のものとと思われるが、仏典や仏教説話などから取材して、スケールの大きい試作がかなり見られることは注目されてよいであろう」。以上のテキストに関する分析からみてもこの意見は間違いないだろう。このような予定されていた規模の大きさは、その当時芥川の戯曲創作への熱意の一端も窺わせよう。

四、「戦遮と仏陀」と「奉教人の死」

以上、「戦遮と仏陀」の材源を明らかにしてから、その材源との比較対照も試みた。そして、本稿の冒頭で述べたように、「戦遮と仏陀」と「奉教人の死」は材源と構成上の繋がりががあるので、次に両者の関連をめぐって説明してゆく。大正七年九月号の『三田文学』に発表さ

れた「奉教人の死」は芥川の切支丹物の代表作の一つとして、あまりにも有名な作品であるが、比較の便宜を図るためにその粗筋を簡単に示しておく。安土桃山時代に長崎のある教会にろおれんぞという敬虔な美少年がいたが、傘屋の娘が彼に妊娠させられたと訴えたため、姦淫の罪を以て教会を追い出される。ある日、傘屋が大火に見舞われ、ろおれんぞは取り残されたその娘が産んだ幼児を救い出して自ら重傷を負う。その光景を見た傘屋の娘は、幼児の真の父親が別人であり、自分の恋心に応えてくれないため、虚言を作ったのだと告解する。そして、焼け破れた服から一对の乳房が現れ、ろおれんぞは女である正体も明かされると同時に前の疑いも晴らされる。

「戦遮と仏陀」と以上の「奉教人の死」は一見すれば、異なる地域での異なる宗教の物語であるが、両者に共通性が見られるのではないかと考えられる。瑣末な比較対照は避けるが、例えば、「妊娠に関する偽りと非難」という点で、戦遮説話（「戦遮と仏陀」）と「奉教人の死」は類似している。戦遮説話（「戦遮と仏陀」）では、戦遮が仏陀によって妊娠させられた姿を偽装して衆人の前で仏陀を非難する。それに対して、「奉教人の死」では、傘屋の娘が妊娠していることは偽りではないが、その私通の相手について嘘をついてしまい、ろおれんぞが衆人から非難されるわけである。また、両者には共にその非難される対象（仏陀、ろおれんぞ）が無実だと証明され、物語の最後ではその疑いが晴らされる。

「戦遮と仏陀」の執筆時期が「柳川隆之介」時代前後であることが

間違いないとすれば、あまり時間的隔たりのない大正七年に「奉教人の死」を執筆するに際して、「戦遮と仏陀」はまだ芥川の脳裏に残っている可能性が高いと言えよう。ただし、両者の関連性についての芥川自身による発言は見つからない。そして、「戦遮と仏陀」（とその材源「妖女の謀計」）と「奉教人の死」には類似表現が見られなさそうである。「戦遮と仏陀」（「妖女の謀計」）がどのような形で「奉教人の死」に影響を与えたかを具体的に検証することはできない。少なくとも言えるのは、両者は時をあまり隔てない、物語の要素が近似している作品であるということである。そのため、両者の間に関連がある可能性自体は否定することができないだろう。

さて、「戦遮と仏陀」（とその材源「妖女の謀計」）から仏典上でのチンチャー説話にまで視野を広げると、一連の類話が存在することがわかる。次に先行研究を踏まえてこれらの類話群について紹介してゆく。すでに述べたように、チンチャー（戦遮）説話は古代インドの仏教説話集『ジャータカ』を典拠とし、『大唐西域記』『法顕伝』『興起行経』など十種類以上の仏典にも類似する記載がある（注14）。下記の論述と関連があるので、ここで特にその中の『興起行経』巻下に所収のチンチャー説話（「仏説波羅門女梅沙謗仏縁経・第八」）を取り上げて見てゆく。この経にあるチンチャー説話はその大筋が「妖女の謀計」に記されている戦遮説話と変わりなく、悪女が偽装の妊娠姿で仏陀を中傷することがいずれもメインのストーリーである。ただし、仏陀が中傷される理由については、「妖女の謀計」にあるよう

な諸外道の嫉妬によることと異なり、『興起行経』卷下に所収のチンチャー説話では、世尊の前々世での宿縁（釈尊（常飲比丘）が前々世で尊者（無勝羅漢）を中傷してその罪を償っていなかったため、前世で大衆の前で悪女から誹謗される）などが語られている。

越野美紀氏は中国の明代の文学者・馮夢龍が編纂した「三言」と呼ばれる叢書の中の一冊、『警世通言』の巻七「陳可常端陽仙化」という説話の種本は、この『興起行経』卷下に所収のチンチャー説話だと推定している（注15）。ここで可常話の梗概を簡単に示しておく。南宋の靈隱寺に陳可常という秀才がおり、時に呉七郡王が寺に詣で、可常の才を愛し、詩詞を作らせてこれを侍女の新荷に唱わせる。その後、新荷は懷妊し、私通の相手を詰問されると、僧の陳可常だと述べる。可常は破戒僧として獄に投ぜられる。だが、長老は可常の平素の德行からこれは冤罪ではないかと考え、彼を獄から救い出して寺の奥に置く。一方、新荷は後にその私通の相手は実は別人だと白状する。これを知った呉七郡王は人をやつて可常を迎えさせるが、可常はかねての覚悟の通り、辞世の頌を残し、草舎に入つて入寂する。

以上は可常話のアウトラインで、原話には可常の前世での五百羅漢の常飲喜尊者としての宿縁、及び入寂後に真身が現れて天へ帰るなどの筋書きが記されている。越野氏は論考で両者の構成、つまり、可常話の「【可常（本来は五百羅漢常飲喜尊者の生まれ変わり）で、前世の債（^{かり}を負う）↓悪女↓妊娠の誹謗（罰を受ける）↓聖者にもどる】」という構成と、チンチャー説話の「【釈尊（前々世の罪を負う）↓悪

女↓妊娠の誹謗（罰を受ける）↓名誉を回復する】」という構成は「非常に似ている」と述べている。その上、他のチンチャー説話には出てこない、『興起行経』だけに登場する常飲比丘（前々世の仏）の名が、可常の前世としての五百羅漢常飲喜尊者の名と類似している点などから、「以上のことより、可常話は『興起行経』第八話（チンチャー説話、引用者注）から（中略）内容に綾をつけて面白く作り上げられた説経であると推定する」とある。

以上の推定が事実であるかどうかは別として、越野氏がまとめている構成から見ても、この二つは広い意味では類話に属すると考えてとにかく間違いないだろう。また、同じ論考にある氏の指摘であるが、「さて、キリスト教聖人伝『黄金伝説』一七四話「聖バルラムと聖ヨアサフ」には、釈迦その人を聖者ヨアサフと名前を変えて、釈迦の「四門出遊」や「出家」の話を巧みに取り入れており、同七九話「聖女マリナ」は「男装の処女が悪女から妊娠させたと誹謗され、受難の日々を送るが、終に天に召される」という内容である。【マリナ↓悪女↓妊娠の誹謗↓試験に耐える↓天に昇る】という話の構成は、可常話とほぼ同じである」とされている。

越野氏は論考で、このような可常話とマリナの話との構成上の類似性を指摘してから、可常話とマリナの話の共通する材源を『ジャータカ』に記されているチンチャー説話と推測して、その前提の下に両者各自の流伝経路や物語の性質を論じている。可常話とマリナの話両者の間に影響関係があるかどうかは触れられていない。さらに、興

味深いことに、日本でも白隠禪師の逸話という、上述の三者と類似する構成がある説話が存在する。白隠禪師の逸話については、越野氏は論考で、「この『白隠↓檀那の女と奉公人の密通・妊娠↓誹謗・冤罪↓真実↓称賛』という筋立ては『陳可常↓庇護者の妓女と奉公人の密通・妊娠↓誹謗・冤罪↓真実↓天へ帰る』という可常話の構成を踏襲している」と述べている。澤田瑞穂氏は「白隠・マリナ・陳可常」と題してこの三者の説話の間の類似性も検討している(注16)。

以上、長々と越野氏の指摘を引用したが、要するに、お互いの影響関係はさておき、チンチャー説話、可常話、マリナの話、白隠禪師の逸話はそれぞれ趣を異にしているが、共通する構成(或いは、すでに述べたような「妊娠に関する偽りと非難」という点)が指摘できるということである。これら一連の説話の間に一体どのような影響関係があるのかは興味深いが、明らかにするためには以上の両氏の論考を踏まえて詳しい考察を行う必要がある。それには大きい紙幅が要する上、本題の論述からかなり外れていくので、具体的な考察は今後の研究に俟たざるを得ない。とにかく、これら一連の説話は類話に数えられることが両氏の論考からわかる。

芥川がキリスト聖人伝中のマリナの話に材を仰いで「奉教人の死」を書いたことは周知の通りである。そのため、チンチャー説話とマリナの話との関連性が以上のように可常話を介して指摘されている以上、それぞれの話に取材して書いた「戦遮と仏陀」と「奉教人の死」との間にはこのような関連性もあつたわけである(「奉教人の死」と

上述した類話の関連については、澤田、越野両氏の論考でも言及されているが、両氏とも芥川がかつて戦遮説話に基づいて戯曲の草案を練り、未定稿「戦遮と仏陀」を残したことは知らないようである)。ただし、このような関連性はあくまでも後世の研究者らの指摘であり、その当時、芥川本人が気付いていたかどうかは別の問題となる。

また、「奉教人の死」の材源がキリスト聖人伝中の聖マリナの話であることはほぼ定説になっているが、構成上の類似性を考慮に入れると、可常話からも影響を受けたかどうかという点は考察に値すると思われる。例えば内容上で、可常話の最後で可常和尚が火光と共に昇天する場面は、「奉教人の死」において芥川の創作と言われる火事の場面(主人公が同じく焼死)を想起させよう。芥川が「杜子春」を書いた時に「三言」叢書の一冊である『醒世恒言』第三十七話「杜子春三入長安」もひともといたことはほぼ間違いないかと指摘されている(注17)。ということは、同じ「三言」叢書の一冊である『警世通言』に所収されている可常話にも目を通した可能性があるだろう。「奉教人の死」の材源説はこれまで多く提出されたが、『警世通言』に所収の可常話との関連に目を向けた論考は調べた範囲ではまだ見つかからない。今後、この方面の考察が為されていくべきだと考える。

よく知られているように、芥川は古今東西の物語から幅広く文学的素材を摂取する。彼の文学作品の中では、その材源を遡れば、多様に富む類話があるのは以上の一例だけではない。例えば、童話作品「蜘蛛の糸」の直接的材源は、仏教説話集『因果の小事』中の挿話「蜘蛛

蜘蛛の糸」であるが、「一本の葱」（『カラマーゾフの兄弟』所収）や「わが主とペトロ聖者」（『キリスト伝説集』所収）などキリスト教系統の類話がある。また、芥川のもう一つの童話作品「杜子春」の材源は、唐代の伝奇「杜子春伝」とされているが、類話としては、『西陽雜俎』所収の「顧玄續の話」と、上述した仏典『大唐西域記』所収の「烈士池の伝説」などがある。定説になっている材源以外に、芥川がこれらの類話を披見したかどうかは、材源研究の一方向として研究者らの興味を引いている。このような材源研究を読むと、別々な物語の間で見えたり見えなかったりする関連性が絡み合っていることが思いがけないのはもちろん、材源面でバラエティーに富む話に目を留めた芥川の炯眼に賛辞を送らずにはいられない。

五、おわりに

― 以上、芥川の未定稿作品「戦遮と仏陀」を紹介してから、その材源問題、及び「奉教人の死」との関連を中心に考察した。「戦遮と仏陀」の材源が堀謙徳著『美術上の釈迦』であることが本稿の結論である。また、本稿では先行研究に指摘されている一連の類話の関連性を踏まえて、従来注目されていなかった「戦遮と仏陀」と「奉教人の死」と材源や構成上での繋がりを指摘した。

この時期に芥川はキリストだけに関心を寄せていたわけではない。彼は釈迦（仏陀）に関わる伝説、事跡などにも興味を抱いていた。釈迦（仏陀）に関連した作品としては、本稿の「戦遮と仏陀」のほか、

『芥川龍之介未定稿集』には釈迦の生涯を流暢な漢文風の文体で描いた「釈迦」、また、仏陀悉達の入滅を背景に持つ「全印度が……」などが見当たると。『釈迦』は府立三中時代の作文だと推定され、高山樗牛に心酔してその著作『釈迦』（博文館、明三十二・一二）を模倣したものだという（注18）。「全印度が……」は大正四年頃の作品で、吠舍城の乞食のクシヤラが仏陀悉達の救済を得ないまま、その瀕死状態が描写される物語である。

このような釈迦（仏陀）物語の創作には、芥川の仏教信仰に接近した姿が見られない。むしろ、物語の題材から見れば、仏教懷疑、仏陀救済への不信が表出されていると考えたほうがよさそう。「戦遮と仏陀」は未定稿のまま中絶しているが、異教徒の仏陀への中傷物語をメインとするのは明らかである。その中では芥川の仏陀喬多摩に対する態度は定かではないが、「全印度が……」では明確に仏陀悉達への批判がなされている。主人公のクシヤラが臨死の時に「悉達がうそつきだ」と叫ぶように、物語中に仏陀悉達の救済への疑念と風刺が端的に表現されている。このような釈迦（仏陀）に否定的な題材の物語は、青年芥川の仏教（仏陀）への態度の一端が現れたものだと思えよう。

芥川の伝記や文学では、彼における釈迦（仏陀）への関心は、西洋を代表するキリストほど高くない。だが、教養主義と宗教文学が盛んであった時代を生きていた彼にとっては、仏教の開祖は知的関心の対象のひとりであったことは間違いない。彼の釈迦（仏陀）関連の作品を数えてみると、「蜘蛛の糸」、及び「尼提」などの作品があり、

『井月句集』跋文(注19)、「侏儒の言葉」の仏陀の節(『文藝春秋』、大二三・二)などの仏陀(釈迦)の事跡に言及した文章が幾つか見当てる。調べた限りでは、芥川と釈迦(仏陀)を総括的に検討した研究はまだ見つからない。芥川とキリストの関連が盛んに検討されてきたのに対して、芥川と釈迦(仏陀)への注目はまだ物足りないと言わざるを得ない。詳細な考察を今後の課題としたい。

注

- (1) 葛巻義敏編『芥川龍之介未定稿集』(岩波書店、一九六八年二月)、同氏編『芥川龍之介未定稿・デッサン集』(雪華社、一九七一年七月)、角田忠藏編『芥川龍之介自筆未定稿図譜』(大門出版美術出版部、一九七一年九月)、山梨県立文学館編『芥川龍之介資料集 図版1・2』(山梨県立文学館、一九九三年一月)、藤沢市文書館編『芥川龍之介自筆資料目録(附・葛巻家資料目録稿)』(藤沢市文書館、二〇〇六年三月)などがある。
- (2) 関口安義『芥川龍之介と『聖書』―初期(基督もの)をめぐる―』(『信州白樺』四十七・八合併号、一九八二年二月)、庄司達也『芥川龍之介「全印度が……」覚書』(『日本文学』四十四(一一)、一九九五年二月)、鈴木暁世『芥川龍之介「弘法大師御利生記」における「放浪者」―J・M・シング『聖者の泉』の影響について―』(『阪大比較文学』五、二〇〇八年三月)、広瀬朝光『芥川「尼と地蔵」の典拠をめぐる』(『アルテスリベラレス』四十六、一九九〇年六月)などがある。
- (3) 吉田精一「解説」『芥川龍之介全集』第六卷、筑摩書房、一九五八年八月。
- (4) 初出『芥川龍之介未定稿集』では、目次表題や本文表題が「戦遮(断片)」とされている。岩波版全集(第二十二卷、一九九七年一〇月)に再録される時に、両方の表題とも「戦遮と仏陀(仮)」と変えられている。全集に付された「凡例」を参照すると、表題の下に(仮)と付されているものは、原稿

に表題が書かれておらず、全集の編集者によって仮に与えられたものである。本稿では、全集に従って全ての表題を「戦遮と仏陀」と統一する。また、「戦遮」の振り仮名については、そのパリ語の名Cibolaが「チンチャ」と訳されることが普通であるので本稿でもそれに従う。

- (5) 森本修「初期習作」(『作品論 芥川龍之介』(海老井英次・宮坂寛編、双文社、一九九〇年二月)に所収)、久保忠夫「芥川龍之介の「青年と死」との材源」(『東北学院大学論集 一般教育』八十二、一九八六年三月)などがある。

- (6) 松本常彦「初期未定稿作品」『芥川龍之介新辞典』、翰林書房、二〇〇三年二月。

- (7) 「戦遮と仏陀」の体裁は「青年と死」と、及び一連の未定稿戯曲断片に一貫する気分劇(象徵劇)である。象徴的作風で作品の情調を重視するのがその劇の特徴であり、代表作家として吉井勇、木下圭太郎らが挙げられる(森崎光子「芥川龍之介と戯曲―「青年と死」を中心に―」(『論究日本文学』四十七、一九八四年五月)を参照)。

- (8) 関口安義、庄司達也編「未定稿・ノート篇」『芥川龍之介全作品事典』、勉誠出版、二〇〇〇年六月。

- (9) 安田保雄「芥川龍之介の『今昔物語』―『国文学叢書』本について―」『比較文学論考 続編』、学友社、一九七四年四月。

- (10) 注(5)の久保氏の論考を参照。

- (11) 注(9)の安田氏の論考、須田千里「『今昔物語集』の内と外―『羅生門』『偷盗』をめぐる―」(『国文学：解釈と鑑賞』七十二(九)、二〇〇七年九月)、稲垣泰一「芥川龍之介の『今昔物語集』」(『説話』一三、二〇一九年三月)などがある。

- (12) ノート「貝多羅葉1」に記されているメモ群と未定稿「全印度が……」の関連については、具体的な考察は別稿に譲ることとする。

- (13) 海老井英次「155「戦遮と仏陀」草稿」『芥川龍之介資料集解説』、山梨県立文学館、一九九三年一月。

- (14) 主人公の名、Cīṇaṣ Maṇavikā (チンチャー マーナヴィカー) は諸漢訳仏典で多様な漢字表記が当てられている。例えば、「梅闍」(『大智度論』)、「梅遮」(『高僧法顯伝』)、「毡遮」(『有部棄事』)、「戦遮」(『大唐西域記』)、「梅沙」(『興起行經』)などがある(赤沼智善編、項目[Cīṇaṣ]、『印度佛教固有名詞辞典』、法藏館、一九六七年二月)。芥川の「戦遮と仏陀」では主人公の名が「戦遮」と表記されているので、芥川がやはり『大唐西域記』系統の仏書を参考したことがわかる。
- (15) 越野美紀「『陳可常端陽仙化』の成立時期と種本に関して」『お茶の水女子大学中国文学会報』二二、一九九三年四月。本文の第四章の論述は越野氏の論考に負うところが大きい。
- (16) 澤田瑞穂「白隠・マリナ・陳可常」『中国の傳承と説話』、研文出版、一九八八年二月。本文の可常話の梗概については澤田氏の論考を参考にした。
- (17) 伊東貴之は「『杜子春』は何処から来たか?—中国文学との比較による新しい読み—」(関口安義編『芥川龍之介作品論集成』第5巻、翰林書房、一九九九年七月)で以下のような指摘をしている。「因みに、唐代小説『杜子春伝』は、下って明清の小説・戯曲、話本の類にインスピレーションを与え、その代表的なものが明末の人、馮夢龍の編纂になる白話短編小説集『醒世恒言』第三十七話、「杜子春三人長安」である。同書は、その通行ぶりからしても、芥川が繙いたことはほぼ間違いないだろう」とある。
- (18) 三井直人「芥川文学の原点へ『義仲論』と高山樗牛」
<http://naotomi.livedoor.blog/archives/575002.html> (二〇一一年七月二日閲覧)
- (19) 拙稿「芥川龍之介と仏教説話—『井月句集』跋文における髑髏叩きエピソードの材源をめぐって—」(『日本語・日本文化研究』三〇、二〇二〇年一月)を参照。